

東京芸術劇場 社会共生セミナー

第3回 「障害のあるアーティストの舞台芸術～ロンドン、東京、そして未来」

2021年11月26日（金）18:00～21:00

オンライン開催



登壇者 岸本 匡史（公益財団法人としま未来文化財団）
栗栖 良依（認定NPO法人スローレーベル 理事長）
ジェニー・シーレイ（グレイアイ・シアター・カンパニー 芸術監督）
南村 千里（パフォーマンス・アーティスト）

参加者数 約65名

情報保障 手話通訳、UDトーク

趣旨説明（東京芸術劇場）

8年前の東京パラリンピック招致が弾みとなり、障害を持つアーティストの舞台芸術活動が活発になっている。2012年のロンドンオリンピック・パラリンピックの文化プログラムの一つとして創作され、2016年にリオデジャネイロでも上演された『The Garden』（野外エアリアル作品）を2020年に新たなバージョンとして東京で上演する計画が進められていたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止になった。当セミナーでは、『The Garden』の創作と上演を中心にこれまでの10年間の歩みを振り返り、アーティストたちのこれからの活動について考えてみたい。

第一部 『The Garden』東京公演計画までの歩み

ジェニー・シーレイ（グレイアイ・シアター・カンパニー）
南村 千里（パフォーマンス・アーティスト）
《進行役》岸本 匡史（公益財団法人としま未来文化財団）

● 『The Garden』の創作とロンドン・リオでの公演

シーレイ： グレイアイ・シアター・カンパニー(<http://www.graeae.org/>)が2008年にロンドン近郊のグリニッチで上演した『The Garden』を見たろう者の観客から、自分たちも演じてみたいという声が上がった。主催のストレンジ・フルーツの人たちから、ろう者にはスウェイポール※のパフォーマンスは無理だと言われたことに反発を覚え、スウェイポールの練習場を作った。

※不安定に揺れる長く立てられたポール。パフォーマーが登り、先端で演技を見せる。

南村： 私もスウェイポールをやってみようと思った。ジェニーが作ったトレーニングコースで、障害者たちが練習に参加した。

シーレイ： 約4mのスウェイポールを苦労しながら自力で登る。登りきった人たちは、皆、嬉しそうだった。

南村： 上までたどり着いたときは、空を飛ぶ鳥のような気持ちになった。障害者にはできない

と言われていたが、宙を舞うことができた。

シーレイ： グリニッチ・ダックリン国際フェスティバルからスウェイポールを使って新しいショーを作ってほしいと依頼を受け、グリニッチの古い墓地を訪れた。そこでストーリーテラー（語り部）の集団を作るアイデアが浮かんだ。観客が共感しやすいような、美しいシンプルなストーリーを作った。

グリニッチで公演をしたときは周囲に花や木がたくさんあったが、2012年に上演したロンドンのサウスバンクシアターの会場はコンクリートだらけだったため、花を飾った。舞台が見えるように野外ではステージを上にしてスロープを作った。パフォーマーたちが客席を通過して登場するため、観客と交流ができた。観客をストーリーの中に取り込むことが大切。ロンドンでは、俳優たちが自ら手話で演じた。視覚障害者たちのために音声ガイドの仕組みも作った。



©Patrick Baldwin

南村： リオデジャネイロでは、英国手話とブラジル手話を使った。ブラジルでは、障害者が舞台上に立つということは皆無に等しい。出演者の中に両足とも義足を使っている人がいたが、それを外したら観客がどよめいた。2012年サウスバンクシアターでの『The Garden』の公演で、見知らぬ人に、ボランティアかと尋ねられ、プロとしてギャラをもらっていると答えたら驚かれた。

シーレイ： サウスバンクシアターでは、ストーリーのシンプルさが好評だった。スウェイポールの技に驚き、感動して2回も観に来た人もいたほどだった。

岸本： 『The Garden』は、障害者がパフォーマーとして出演していることで、大きなインパクトがあり、強い影響力があった。日本でも『The Garden』を上演しようと企画し、オーストラリアで障害のあるパフォーマーと一緒にトレーニングを積んできたが、新型コロナの影響で実現に至っていない。スウェイポールのパフォーマンスは、屋外で通りすがりに見てもらえるところに特徴がある。人通りの多い場所で、ぜひこのパフォーマンスを実現したい。

シーレイ： 日本の障害者の方たちは、既にスウェイポールの技術を身につけている。彼らの技を披露するチャンスを設けることは大切だ。『The Garden』公演をぜひ実現させてほしい。

岸本： 『The Garden』は、音楽の演奏者も障害者。全キャストが日本人の新しい日本版『The Garden』を作りたいと考えている。演出はジェニーにお願いしたい。

質疑応答

●アクセシビリティ

シーレイ： トレーニングには手話通訳やサポーターが必要。車いすの乗り降りの介助など、ニーズに合わせた対応した。

●日本での障害を持つ演出家の育成

シーレイ： 演出を希望する障害者の方たちにチャンスを与える必要がある。メインストリームの演出家について回り、現場を見て学ぶのもよい方法かもしれない。

南村： 聴覚障害があるが、自分でチャンスを作り、劇場や関係者と交渉しプロジェクトを立ち上げてきた。劇場側とコラボレーションをすることで、上演の機会を得ることができる。考えることも大事だが、実行することのほうが重要。

●専門的な知識を持つ手話通訳

シーレイ： 舞台・アート関係の手話通訳を目指している方は、ワークショップなどでトレーニングを積む必要がある。(舞台手話通訳を養成する)コースを設ける方法もある。東京に行く機会があれば、舞台手話通訳トレーニングをやらせてほしい。

南村： 舞台に関わる手話通訳の方たちには、舞台をリードするのはあくまで聴覚障害者たちであることを忘れないでほしい。

第二部 障害のある人々の舞台芸術活動の展望と課題

栗栖 良依 (認定NPO 法人スローベル)

ジェニー・シーレイ (グレイアイ・シアター・カンパニー)

《進行役》岸本 匡史 (公益財団法人としま未来文化財団)

●東京パラリンピック式典でのパフォーマンス

シーレイ： 東京パラリンピックのパフォーマンスは、無観客だったため、作る側も上演する側も大変だったと思うが、障害者たちが素晴らしい表現をしていた。

栗栖： 巨大な組織の中に放り込まれ、障害のあるアーティストたちやサポーターの想いを背負い、長い年月一人で戦ってきた。今年(2021年)に入ってから状況が大きく変わり、障害のあるキャストたちを多く出演させることができた。約5500人の障害や難病、心に傷を負っている応募者から、オーディションでキャストを選んで、彼らを起点に表現を作り出した。

●障害者のパフォーマンスアートに関する考え方の変化

栗栖： オリンピック・パラリンピックの文化プログラムにより、文化芸術界においては、障害者が活躍できる場が整ってきたが、民間主導のエンターテインメントやイベントでは、9割を健常者が作り、最後だけ障害者を起用するといったことが多い。

シーレイ： イギリスの地方の劇場では障害者を起用するケースが増えている。作曲家や演出助手として現場に就く障害者もいるが、スタンダードではない。アーティストを志す、能力の高い障害者は多い。これまで、障害を持つ演出家に取り組んだことのないシェイクスピアなどの演出もしてみたい。確実に少しずつ変化が生まれ、障害者の間に自信が生まれている。

グレイアイ・シアターで研修を受けた方がその経験を生かして、日本で劇場のアクセシビリティを向上させる活動をしている。障害のあるアーティストたちがパフォーマンスをすることは人権である。

栗栖： 技能を磨くチャンスがないと、せっかく身につけた知識も薄れてしまう。場数を踏み、活動を続けることが重要だが、



左上より、栗栖、シーレイ、日本手話通訳士
左下より岸本、英国手話通訳士2名

オリンピック・パラリンピックの文化プログラムという枠組みがなくなった中で、機会を作り続けていくということは日本では難しいかもしれない。

●日本はこれからどう変化していくべきか

栗栖： 日本にも英国のアーツ・カウンシルのような機能を持つ機関があるが、ほとんどのプログラムは、単発事業の助成。イギリスの場合、団体を維持する団体活動費への助成があると聞いている。日本でも、団体の運営基盤に対しての助成があれば、継続的に活動できると思う。

シーレイ： 公的助成が受けられなければ、民間に頼ることになり時間がかかるだろう。イギリスではフリーランス向けに、個人の創作のプロセスに対する助成を行っている団体がある。作品化が決まれば全コストを助成してくれる。その他、俳優のトレーニングの活動支援などさまざまな団体がある。

岸本： 作品だけでなく全体の仕組みへの助成や補助を考えてくれるといい。

栗栖： ミュージシャンは活発に活動できるが、ダンサーや役者は身一つで作品を作るのが難しく、舞台の機会を待っていることが多い。

●ロンドンパラリンピックとその後の障害のあるアーティストの状況

シーレイ： ロンドンパラリンピックでは、戦いの連続だった。共同演出者と共に、障害者としてパラリンピックのプロジェクトに取り組んできた。巨大組織に対して障害者たちのみのキャストで作品を作ることが大切だと理解してもらった。障害者たちがリーダーシップを取れるように尽力した。

開会式の翌日、新聞に生き生きした障害者たちの写真が掲載され、障害者の人権が勝ち取れたと嬉しい気持ちになった。障害を持つアーティストたちに大きなチャンスを作ることができた。観客に対して、障害者たちが作ったアート作品を見てもらおう場を作ることができた。何でもできるという自信に繋がった。

パラリンピック後、イギリス政府の手話通訳者やヘルパーに対する支援予算のカットで、障害者が関わるイベントの数は大幅に減少した。グレイアイ・シアターはロビー活動を活発に行い、障害者がもっと参加できる状態を作ろうとした。その結果、多くの作品を作れたが、アクセスのためのコストがかかり、厳しい状況だ。一方で、アーツ・カウンシルは障害者たちへの支援を強化してくれた。若手のアーティストや役者希望の障害者たちに堂々と戦ってほしいし、なりたいたいものになれると、彼らの気持ちを導くようにしている。

●障害のあるアーティストの育成

シーレイ： イギリスでも専門学校や演劇学校では障害者を受け入れる体制が整っていない状況があるので、グレイアイ・シアターで独自のコースを作った。学生に対する助成制度やアクセシビリティを支援する委員会はある。

栗栖： 障害者がさまざまな活動をするときに手話通訳を手配する補助など、アクセスに特化したサポートの仕組みが日本にできるとよい。団体側や主催者側ではなく、障害者個人が申請できるような仕組みがほしい。

シーレイ： イギリスでは、障害者が劇場で演劇鑑賞をする際は、ヘルパー分の経費は劇場、主催者側が持つ。

栗栖： 障害者を起用するためにかかる手間やコストを気にする主催者は多いかもしれないが、補助があれば、障害のあるキャストを受け入れられるようになるだろう。新しい仕事が増え、チャンスも生まれる。そういう制度が日本にもできれば、もっと文化が豊かになると思う。アクセシビリティの体制を整えばよい循環が生まれる。手話通訳者が通訳料を稼いで税金を払うことで、経済の一部を担うことになる。

スローレーベルでは、パフォーマンスに挑みたい障害者のための半年間のコースを準備している。また、プロを巻き込んで、民間のエンターテインメントの世界に繋ぐ架け橋になるようなプロジェクトを作れないか検討している。スローレーベルとグレイアイ・シアターで、交換留学ができればいい。

岸本： 文化活動を通して、障害者に対する偏見や先入観をなくすことで、国民全体の意識を変える助けになると思う。劇場の調査では、コスト面より人材が不足しているとの意見が多い。コーディネートできる人材の育成も急務だと思う。

栗栖： 多くの方の力を借りながら協力し合ってアクションを起こし、これまでに話してきたことを実現したい。

シーレイ： 強い決意を持つことが大切。ドアを叩いて、私たちがいるよとアピールすることが大切。考えるだけでなく実行してほしい。